

## 解答

一 問一 A スタッフにニュースの素人が多かったことと、聞き手が子どもだったこと

B スタッフや子どもたちの素直な疑問

2 わかるまで掘り下げ、根本から徹底的に調べ、考えるようになった

問二 「海峡」と言ったり「水道」と言ったりするのか

問三 ウ

問四 1 トレーナー 2 シェフ 3 マネージャー 4 ドライバー 5 キャプテン

二 1 快↓会 2 自↓持 3 感↓観 4 頂↓潮 5 解↓開

三 1 カ 2 オ 3 ア 4 ウ 5 キ

## 四 解・詩・望・量

五 A エ↓ウ↓イ↓ア↓オ B ウ↓イ↓ア↓オ↓エ C イ↓エ↓ア↓オ↓ウ

六 例 ア A 身 B 味 ① 母 ② 子 ③ 優

例 イ A 田 B 他 ① 作 ② 成 ③ 出

例 ウ A タ B 有 ① 行 ② 進 ③ 開

## 解説

一 出典は、池上彰『伝える力2』

「自分が知っていることは、だれもが知っている」、つまり「常識」だと勘違いしがちです。テレビの子ども向けの番組『週刊こどもニュース』のお父さん役を務めたことで、子どもたちやスタッフの素朴な質問が、そんな「私の勘違いを正してくれた」という内容の随筆風の説明文です。

問一 A 番組『週刊こどもニュース』が高い評価を得た理由はどこにあったと筆者は思っているか、というのが設問です。筆者は「私なりに分析してみると、主な理由は二つある」と述べたあと、段落を変えて、「一つは、番組の制作スタッフにニュースの素人が入っていたことです。」と一つの理由をあげてくわしく説明し、さらに『週刊こどもニュース』が高評価を得たもう一つの理由は、聞き手が子どもたちだったことです。」と二つめの理由をあげています。それをうけて、「スタッフにニュースの素人が多かったことと、聞き手が子どもだったことが、どうして番組作りに役立ったのでしょうか。それらによって、番組はなぜわかりやすいという評価を受けることになったのでしょうか。」とあるので、「スタッフにニュースの素人が多かったことと、聞き手が子どもだったこと」が「三十五字以内でぬき出し」の答えとしてぴったりです。

B 「それがなぜ高い評価につながったのか」というの設問についても、今あげた箇所「それらによって、番組はなぜわかりやすいという評価を受けることになったのか」から、これに続く段落にその答えを見出すことができるでしょう。

問二 直前に「水道」も「海峡」も同じ意味で、「海が陸地に挟まれて、狭くなっている所」を指して言うのだと述べられています。となれば、なぜ「水道」と言ったり「海峡」と言ったりするのだろうか、という疑問が出てくることとなります。解答欄のサイズから判断して二十字前後で書けばよいでしょう。――参考のため原文は、「津軽海峡」「関門海峡」など「海峡」を使った名称と「豊後水道」「紀伊水道」など「水道」を使った名称があるのか（63字）、となっています。

問三 報道記者であった筆者にとっては常識だった、つまり「自分が知っていることは、だれもが知っている」と思っていたのに、子ども向け番組を作っている制作局のスタッフや子どもたちからは、『それはどういう意味ですか。』『どうしてそうなるんですか。』と、政治や経済、国際問題の基礎知識に関する質問が次々に私に浴びせられることになりました。『エッ!』そこから説明しないとダメなの?』と思うこともしばしば。』とあります。

問四 いずれもよく耳にし、自らも使う外来語でしょう。1（選手の体調を整える人）トレーナー 2（料理長）シェフ 3（チーム全体の世話をする人）マネージャー 4（自動車の運転者）ドライバー 5（チームの主将）キャプテン

二 ー じゅうぶん満足できるという意味で「会心」と表記します。2 「自論」と書いても意味が通じているようだが、いやすが、正しくは「持論」と表記します。3 「感」は感じ方・そのものから受ける印象で、解放感・安心感・達成感などのようにつかえます。「観」は考え方で、価値観・人生観・死生観などのようにつかえます。4 「最高潮」が正しく、場が最も盛り上がる状況をさします。5 「門戸開放」は、港や市場を外国の経済的活動のために開放することです。

三 五七五という俳句の音数の基本を念頭に考えましょう。ー 木に止まるから、鳥か燕。燕は三音で、燕が木に止まっている姿はあまり想像できません。2 “天高く馬肥ゆる秋”の言葉通り、清朗な秋空の下で、馬糧も豊富になって馬も豊かに肥える喜びと季候のよい秋の季節を形容した句です。3 穴を出るから、蛇か蛙。蛙は三音だからふさわしくない。“蛇穴を出づ”は、三月上旬の啓蟄の頃を表す春の季語です。4 突き当たるのだから、それなりに重量のあるものようです。猟師の獲物でしょうか。5 巢立ちをしていない燕のヒナにとっては、“空”というのはまだ自分の世界には存在しません。

四 まず慣用表現の空欄を正確に埋めましょう。

・千里の道も一歩から ・伝家の宝刀をぬく ・一寸の虫にも五分のたましい ・角をためて牛を殺す  
・存亡の危機 ・日進月歩 ・不言実行 ・学問に王道なし ・全勝力士に土がつく  
それぞれがどういう漢字の部品として使えるかを考えることになります。必ず三つ使うという条件や「一」「牛」「亡」が漢字の一部になっているものは限られていることなど、手がかりになるはずです。

五 まず正確な“仮名遣い”が基本が問われ、次に国語辞典の配列である“五十音”というのが理解できているかが問われています。たとえば、「つ」「づ」は、“五十音”順ではどちらも同じですから、“てづくり(手作り)”のほうが“てつづき(手続き)”より も前に出てきます。

六 重箱読みや湯桶読みをする熟語は意外と少ないのです。せいぜい一割といったところでしょう。条件から、A「分」は重箱読み、「畑①」と「A刊」は湯桶読みであることが分かりますから、その辺りから手をつけていきましよう。